

情念における自由

——パンジャマン・コンスタン『アドルフ』の分析の試み——

I 『アドルフ』と『クレイヴの奥方』の

補色的関係

フランス文学史において心理分析小説の系譜が存在することを認めるにしても認めないにしても、ルネ・ラルウの一句——「心理分析小説というジャンルはフランス文学の榮譽の一つである」——を否定し去ることはむづかしからう。あらゆる作品は時代と個性の産物であり、伝統とは同じ風土が花咲かせる資質の色合いにすぎず、また、ここで用いられた「ジャンル」は推理小説のジャンルなどと表現する場合とは少しばかり異なる用いられたジャンルのジャンルであるという異議がもち出されたとして

genre

萩原 茂久

も、十七世紀の『クレイヴの奥方』と十九世紀の『アドルフ』とを、一方が先祖であり他方が子孫であるというふうな垂直線上によりはむしろ、同類として横に並列して比較をおこなうことにそれほどの不都合はないと私は信ずる。

そのようにしてざっと比較してみると、これら二つの作品は不思議なほど相補なうものをもち、二つを一つにしてある完結した心理世界が現出するとさえいえるのである。ヌムール公はついにクレイヴ夫人をわがものにはできなかったが、もし征服しえたならばその後の運命はどうなったであろう。おそらくクレイヴ夫人が予見したようになったかもしれない。相手を征服しえたのちのヌ

ムール公の物語りこそ、まさに『アドルフ』一篇であり、作らない関係における勝利と、作ってしまった関係における敗北との対比は、女の心理世界と男の心理世界とにそれぞれ重ね合わされつつ、しかも全体としては悲しみのたちまじった誠実さという薄明の色合いを帯びる。

クレイヴ夫人が俗世的徳の代表者として母親シャルトル夫人をもち、作品の前半においては明らかにその指導と影響とに引きずられる姿勢を見せるのに対し、アドルフはドイツの某選挙侯に仕える大臣を父親にもち、地位と榮譽にかかわる期待と約束とを——たとえ表面的には反抗していたとしても——心の底では当然のように受け入れている。また、補色的というほどでもない類似の関係としては、『クレイヴの奥方』においておびたしい数の宮廷人たちが、それぞれ固有名詞は与えられているもののそれは記号にすぎず、抽象的粒子の存在であるのと似て、『アドルフ』においては少ない人数の脇役たち——すなわち、父親、P伯爵、エレノールの女友たち、T男爵など——もちろん十九世紀の小説概念からそう見られるのであるが——登場人物としてはあまりに抽象的で希薄な影と化しており、その傾向が女主人公のエレノール

にまで及ぶことはマルセル・アルランも指摘している。⁽²⁾

その他、夫婦あるいは内縁関係において愛にまぎれられしい「尊敬」と「感謝」が存在し、それが第三者の侵入による恋愛関係の素地となることや、衝撃を受けた主要登場人物のひとりが小説的に死に至ることによって⁽³⁾「情念に殉ずる」という純粋性と同時に非現実性という印象をも与えることなど、両作品に要素的な類似を見いだすのはそれほど困難なことではない。

II 心理分析小説に入りこんだ「性格」の観念

さて、両作品に登場する主人公がクレイヴ夫人とかアドルフとかの固有名詞をもっていながらも、実は情念そのものであり、魂の状態であり、物語りは主人公の運命の消長を決定することに奉仕するというよりは、情念分析の新しい機会を提供するといえるが、それでもなお、分析は全体として行きつ戻りつのアンビヴァレンツな相を呈するのである。そのために、とりわけ『アドルフ』においては、物語りは存在しないとい切ることも可能であり、ひたすらな「けいれん」状態⁽⁴⁾と形容されるのもあながち不自然なことではないであらう。

『クレージュの奥方』でおこなわれる心理(情念)分析が『アドルフ』のそれにくらべ、表面的にはより美徳あるいはストイシズムの仮面におおわれながら、内実は自己犠牲にはほど遠い自己愛ないし自己防衛の強い衝動をあばき出すのに対し、『アドルフ』では、「恐れ」「不決断」「卑怯」「後悔」「苛責」などの、一見すれば人間のあらゆる弱さを集めてそこにさらけ出していながらも、それは自己愛の力をいやおうなしにたわめる、「憐れみ」という美しい弱さの光源によって照明されているからだということが感じとられるのである。

この「弱さ」は『アドルフ』における弁明的な一つの調子を形づくっている。この作品はギリシャの古式にならうかのようにプロローグとして「発行者の意見」があり、エピローグとして「発行者への手紙」——「返事」があつて、そのあいだにレシの形で小説が展開しているが、他人の手記を拾得して十年間保存したのちに、この発表がだれをも傷つけずだれの名誉をもそこなわないと判断したという設定の「発行者」が、その判断の根拠となった手記の筆者の知人からの手紙に対し、書いた「返事」のなかにつきのような文章が見いだされる。

感情的思考

「私はこの弱さを憎みます。それ自身の無能をつねに他に責任転嫁し、害悪は周囲にあるのでは全くなく、まさにそれ自身のうちにあるのだということが分らないこの弱さを憎みます。アドルフは彼の性格について彼の性格そのものにより罰せられたのだと………」⁽⁵⁾

アドルフの弱さは彼自身の弱さにとどまらず、結局は男の、とりわけ若い男の弱さであることは誤りのないところであるといふものの、この弱さの核をなす timidity が性格として、遺伝的ないし幼時環境的に形づくられたことを述べる作者の表現は注目すべきであり、エマ・ニエル・ボ・ドゥ・ロメニのようにこの部分が分析のなかで最良のものだと認める研究者がいるのはうなずける。

timidity によってアドルフの父に対する態度自体、および社交界における態度が決定されるが、この父から遺伝的に受けた性格が意思の疎通にくい父子関係心理をかもし出し、のちにアドルフが成長して才気ある心理家になるまでは父の愛情やほんとうの姿を誤解させるのであるし、また社交界においては閉鎖的・孤獨的になって真実の考えをかくすようになるのである。

timidity

このような性格の観念はたしかに十九世紀的なものであり、十七世紀の『クレヴの奥方』などにある図式的な肖像とは異なる次元のものであることは否定できない。作品的にはこの弱い性格——timidie がほんとうによく生かされているとは思われず、アドルフがエレノールという対象を見いだして行動に移るやいなや、恋愛情熱における青年一般の「性格」を超越した非個性的なボタンが浮上してくる。また、エレノールが重みと感じられるようになって以後、アドルフが訣別の宣言と行動を望んでいく度も決心しながらそれができなかった期間、その心に作用した根本のものは、timidie に似ているとはいふもののそれとは違うものであり、timidie がこの小説の全体を通じては脈絡を失い、序説的な部分だけに孤立しているといってもいいすぎではないだろう。

しかし、性格の観念の象徴としての timidie は主人公の立ち場において有効なものとはなりきれなかったが、別の意味で作者の立ち場において大きな成功をおさめたとは私は考える。すなわち、心理分析小説自体の存在理由をそれは意識化したのであり、心理と表現(言動)との差をア・ブリオリに見ぬく心理家の精神装置を暗示

的に規定したのであり、timidieこそ「もっとも深い印象を心で押し殺し、ことばを凍らせ、いおうと望むことを誤解されるふうに表示させ、……あ、いまいなことが、多少とも辛らつな皮肉によってしか心の思いを述べないようになせる、内的な煩悶」なのだ。

III 荒野の孤独としての「自由」の認識

このようにして、心理分析小説としては個性的な「性格」という観念が、作品構造全体のうえでは粘着性をもつまでには至らなかった『アドルフ』の場合、情念分析的にどのような全体的特色をもつといえるのであろうか。『アドルフ』一篇は情念の小説ではなく、関係解消(ただし成功しなかったところの)の小説であるという意味のことをジョルジュ・ブーレは⁽⁸⁾いったが、対象とする女性⁽⁹⁾がもはや「目標」ではなく「束縛」となった瞬間からこの小説はほんとうに始まるのであり、恋愛の歓喜をすら表現してはばからないそれまでのほんの一時期は、エレノールを対象と定め、社交界的にその征服をもくろんで実行する初めの段階とともに、一冊の書物のなかでは序言の重み程度のものしかないといえることもできよう。

しかし、「関係の解消」ないし「訣別」は束縛と自由とのあいだで一見大きく揺れうごく一青年の心のなかでは貴重な価値を示すものではあっても、ほんとうの意味でそれを獲得するとき価値があり喜びが感じられるものとなるであろうか。その疑問に対しては、作者の側からと、作品自体の側から異議を提出することができないではない。

『アドルフ』執筆と同じ時期の作者コンスタンの日記は、もっと複雑な関係における訣別の熱望を示している。⁽¹⁹⁾ある一つの関係（たとえばシャルロット）をより安定したものとするために、他の以前からある関係（たとえばスタール夫人）を解消しようとするのであるが、そこには数あるなかから一つを選ぶとする選択の意志が働き、一つだけの関係を破ることから生ずる自由——そこに存在するはずの全き孤独への恐れを感じる境地からは遠いといわなければならない。いうまでもなく作者と作品の主人公が一致するわけではないが、作者の心境があるべき作品とは異質の、ゆとりあるものであったことは証明されるのであり、それがかなりの影響を作品に与えていることは否定し去ることができない。

また作品自体について見れば、エピソードとしての「発行者の手紙」のなかで作者は、「あれほどの苦痛とあれほどの涙とを犠牲にしてとり戻した自由の使いみち」⁽²⁰⁾がなんらなかったことを述べており、第十章においてはエレノールがショックを受けた結果死んだことにより、現実には自由を獲得したアドルフはつぎのように感ずるのである。

「私は最後の束縛が断ちきられたのを感じ、恐るべき現実が永久に彼女と私とのあいだにおかれたのを感じた。あれだけ彼女は私に重くのしかかっていたか、あれほど私になつかしんだこの自由！ どれだけ彼女は私の心にさからっていたか、たびたび私を憤激させたあの従属！ いままでは私の行動はすべて目的をもっていた。それらの行動の一つ一つが、苦しみをやわらげ、喜びを生ずるという確信があった。当時は私はそれを嘆いていた。愛する目が私の一挙一動を観察していることに、他人の幸福がそれに結びついていることにじりじりしていた。いまは、だれも私の一挙一動に目をとめない。それはだれの興味も引かない。だれひとりとして私の時間をえようと争いはせず、私が外出するときだれの声も私を呼びも

どしはしない。私は自由だ、まさしく、私はもう愛されてはいない。私はみなにとって「異邦人」なのだ」

こうして自由という存在形式が荒野の、砂漠の全き孤独を意味するのだという認識にアドルフは到達するのであり、他者との愛の不毛な土壌において、幸福であれ不幸であれ人間関係において心を、従ってからだを生の実感で満たすところの情念があるとすれば、愛惜と後悔というせめてもの過去の情念にすぎないであろう。

この個所についてジャック・ロアンリ・ボルネックは、「自由における孤独のこういった苦悶はコンスタンにおいては生来のものである」⁽¹³⁾と注記しているが、一七九三年ヴィルヘルミーヌ・フォン・クラムとの結婚の破綻のさい、コンスタンはつぎのように叫んだ。「一年以上まえから私はこの瞬間を望んでいた、完全な独立を願っていた。それはきた、なのに私はおののいている！ 私は孤独にとり巻かれて茫然自失している」

彼の生来のものというよりは、このような体験をへて自由の代償を深く恐れるようになったにちがひなく、一八〇五年のスタール夫人の場合、一八〇七年のシャルロットの場合には孤独になりはしまいかとの不安におの

いている。さきにもちよつと触れたように、これらの場合には背景に他の異性関係も存在するのだから、コンスタンの「訣別」すなわち「自由」への恐れがどれほど深かったか、改めて強調するまでもあるまい。

IV 『アドルフ』の梗概

さて、論をさらに進めるために、ここで可能な限り手短かにこの作品の梗概を述べる必要がある。

ドイツのある選挙侯の大臣である父と「私」とのあいだには「内気さ」が存在するために、本心を打ち明ける関係にはない。父がもつ愛情がわからず、「私」は彼に対して感謝と尊敬は抱くが信頼はもたない。この「内気さ」は傲慢と疑心とないまぜになっており、外界に対して皮肉な眼を向けるが、これを遺伝として父から受けた私は、同時にまた幼少時における父との関係によっても、その性格形成に重大な影響を及ぼされ、閉鎖的で孤独な人間となり、社交においては真実の考えをかくすようになる。「第一章」からかい、嘲笑、侮蔑、沈黙により、社交界からは軽率、皮肉、意

地わる、背德的の評判をえた。「私」は二十二歳でゲッチンゲン大学を卒業後、D——に行っていたのであるが、親しい友人が恋愛に成功したことに刺激され、退屈をまぎらし、自尊心を満足させ、さらには新しい未来がひらかれる気がして、家族同志が親戚のP伯爵の愛人エレノールを愛するようになる。彼女は生まれはよいが、動乱で家が廃絶したため不幸と苦難を味わい、P伯に保護されるに至ったポーランド女であり、「私」より十歳年長であった。エレノールは献身的に事実上の夫を助け、昔の財産を回復させ、ふたりの子を生んでいた。「私」は彼女に接近、「食卓の場」で相手の心を獲得したかと思えるが、「第二章」その独占を求めて過度に情熱的な行動へと移って行く。彼女の恐れと関係を絶とうとの気持ちにうちかかって、「私」の恋愛の熱烈さは以前同種のもの味わったことのないエレノールの心を最終的にとらえる。「第三章」P伯の不在中に「私」と彼女とは恋愛生活を送るが、このころから彼女が私にとって束縛と化する。エレノールの情がこれまでになく高まると同時に、「私」には苛責の念が生ずる。そのとき父から、帰ってこいとの手紙

が届く。彼女の懇願により、父に滞在延長を願い、許される。後悔を感じ、それが彼女に感じとられいい争いとなる。「私」のためらいに反して、エレノールはP伯と別れることを決心する。そして新しい住居に移り、「私」は相手の犠牲を受け入れる。「第四章」エレノールはP伯と別れ、保護者を失なった彼女への世評は悪化する。「私」の愛情は消えかかり、ふたりはたがいによりに真実を打ち明けないようになる。エレノールを侮辱した男と決闘、傷ついた私を彼女は献身的に看護する。愛していないのに愛される苦しみ。「私」は出発して父のもとに帰り、二カ月間ふたりは文通する。手紙に訣別の意思を表明しようとして、どうしてもできない。エレノールは合流してくる。喜んで迎えない「私」を彼女はなじり、憎しみをぶつけ合うようになる。父はエレノールを追放するという手段に出た。彼女への極度の憐れみによって、「私」は彼女を救い出し、国境の外へ逃げる。「私」は彼女の犠牲になったことを感ずる。「第五章」手紙による父の愛情と理解が「私」を苦しめる。ふたりはカダンに滞在する。P伯の申し出（「私」と別れることを条件に、財産を分

与すること)をエレノールは拒絶、この新しい犠牲はまたもや「私」の負い目となる。この関係を打ちきるべき時だと思いが、別れのためのことは彼女を失神させ、「私」はふたたび相手に愛を誓ってしまう。エレノールの父がポーランドに呼びかえされて名誉を回復、孤独なためにひとり娘である彼女に看病してもらいかなかった。「私」の愛に不安を感じ、彼女は行こうとしない。そのうち彼女の父は突然に死んだ。エレノールは後悔する。ついにふたりは出発、旅がこの関係を一時的に緩和する。「第六章」父はポーランド駐在のT男爵に私の保護と説得とを依頼した。私はT男爵をたずねる。帰途、無益な青春を過ごすことに嘆息し、夜間の田園で大自然による広大な観念に帰る。無私の感情が「私」に放棄と無関心と時による解決を靈感的に吹きこむ。エレノールが極度の不安と焦慮に落ちいて「私」を探しに使いを出し、そのひとりに出会う。「第七章」エレノールは女友だちに頼んで私の真意をたずねる。彼女は生活方法を変え、ひとびとを周囲に集め、気晴らしがふたりの仲を保たせた。エレノールは「私」に嫉妬をおこさせようと、男たちを身辺に引き

よせはじめる。これを理由にして自由になれるときに、「私」はそれをしない。彼女は取り巻きを縮小してふたたび私を束縛する。「第八章」「私」はT男爵の集まりに出て、快い気分を味わう。しかしひとびとは「私」を妙な眼で見ると「私」のエレノールへの服従はT男爵の輕蔑をうける。彼に三日間を約束してエレノールから離れることを決心する。だが、やはり決断できず、T男爵にさらに時日の猶豫を願う。「第九章」別れが近づいているという気持ちだが「私」を自由にし、ふたりの関係は意外に甘美であった。ある夜T男爵の使いの者が、「私」の書いた手紙(エレノールと別れることを約束した)を彼女のところにもってきて見せ、そのためエレノールは死の床に倒れこむ。彼女の願いにより、彼女を連れて冬の野をしばらく散歩する。エレノールは病状が悪化して死ぬ。彼女と「私」との最後のきずなは絶たれる。「私」は自由だが、もう愛されていなかった。「第十章」

V 予定的・予感的な別れと情念

この小説(レシの部)は、さきほど触れたように「関

係解消」の小説としての意義を重く見るならば、エレノールが束縛と感ぜられてからの部分を本論的な位置に据え、それ以前を序論的なものと考える二層的な作品構成をもつといえる。分析的には青年期以前の性格形成を第一とし(第二章の初めの部分まで)、エレノールへの恋愛情熱が正の方向に噴出する時期(第四章初めの部分まで)負の方向に流れる時期(終わりまで)の三期に分けるのが自然なものといえるであろう。

女主人公を目標として意識し、これを征服するまでの心理分析にはアンビヴァレンツなものがなく単純であり明快であり、クレイヴ夫人のようなけいれんの動揺が見られない。このような状況の男性心理は典型的にはそうだとすなわけないこともないが、アドルフのような「性格」形成をして一種複雑な *timidity* を抱きつづけている者には、もっとアンビヴァレンツな相があるべきなのが自然ではないかと思われる。とはいえ、「別れ」(の願望)の心理を分析することに力点がおかれているこの作品について、この時期のそれを詳細に説明している時間もないし、紙数もない。

さて、力学的に情念が負の方向に引っぱられる第三期

——すなわち第四章から終わりまで——において、主要な分析の軌跡はアンビヴァレンツな相を呈するとはいうものの、むしろそれが一方向に、正の方向に向かう場合が見いだされる。代表的なものを二・三ここに挙げよう。第一は第五章において、アドルフが父のもとに帰るべき時が到来して出発した直後である⁽¹⁴⁾。作者は普遍化した箴言の形でつぎのように書く。「われわれは遠くから、冷静に、それら(関係)を破る決心をつくりあげる。そのことを実行する時期をじりじりしながら待っているつもりになっている。しかしその時がくると、心は恐れで満たされてしまう。喜びもなく共に暮していたひとびとから断腸の思いで別れるときの、われわれのしみじみな心の気まぐれさはそういった具合なのである」

エレノールはアドルフの出発に反対したり、涙を流して悲しんだりはしなかった。それは二カ月後に彼女は彼に合流できる希望があったからであり、彼女に迫られてアドルフはそれを約束している。いっぽうアドルフの方にも逆の方向の希望があった。この出発は真の別れではないが、エレノールが合流してくるまでの二カ月のあいだに、手紙によって訣別の宣言を相手にしてやれるのだ。

しかしその訣別の宣言は現在のものではなく、単に未来の予想として存在しているものであり、自由な想像の領域に息づいているものである。だから、訣別の宣言があくまで可能性として、従って逆からいえば、不可能性として存在するかぎり、アドルフの自由は苦しみをとまなわれない形でその魂のなかにすでに成立しているものであり、現実の苦しみある自由よりもはるかにゆとりのある感動がその胸に湧きあがるのである。

第二には、第十章の初めの部分⁽¹⁵⁾において、アドルフがより安らいで、より甘美な時を送っている部分を検討しなければならない。

「私は以後の日々をもっとおだやかな気持ちですごした。私は行動する必要をうやむやにしてしまっていた。彼女はもう幽霊のように私の心につきまといはしなかった。いつでも彼女を覚悟させられるつもりだった。私はせめて友情の思い出を失うまいとして、彼女にもっとやさしく親切にしてやりたかった。私の動揺はそのときまで私の味わたったものとは全く違っていた。私とエレノールとのあいだに天が、踏み越えられない桓根をとつじょ築いてほしいと願っていたのだが、その桓根がすでに築

かれおわつたのだ。私は失おうとしてゐる存在としてエ
レノールにまなざしをじつと向けた。あれほどくり返し
て堪えがたいものに見えた無理無体な要求がもう私をび
くつかせなかつた。自分があらかじめ、そのような要求
から解放されたのを感じていた。もつと彼女に譲歩しな
がら、しかも以前よりもさらに自由であつた。かつては
すべてを引き裂こうと絶えず私にしむけたあの内的なほ
げしい感情を、もはや私は感じなかつた。もはや私には
焦慮がなかつた。それどころか、不吉な瞬間を遅らせた
い、△ そかな願ひさえもあつたのである」

この個所は第一の引用の個所と相似であり、アドルフにとつて予感的な終わりが感じられるにしても、実行の意志がその裏づけとなつてゐるわけではない。ただ父の依頼を受けたＴ男爵に対して彼はエレノールと別れることを約束していたのだから、実行がある意味で決定的な第一歩を踏み出したことは否定できない。しかしあくまで、相手から迫られ、自分の意志によつて進んずるのではないという姿勢を崩さず、またＴ男爵がみずからの手でこの関係を断ち切るべく乗りだしてくるとは夢にも考えられない段階においては、アドルフの情念は確定的

な不決断、不実行の延長線上に永遠のたゆたいをつづけていたかもしれない。アドルフの、なにものをも恐れる必要がなくなったこの時期の、相手に対する愛情ややさしさは、自由が希望のなかで保証されたからこそ出てくるのであり、関係は断ち切られるどころか、かえってそれを引き延ばしたい願望によってひそかに支えられさえする。

VI 反省と瞑想に関する場面の考察

さて、以上で別れの期待によって愛についての感動を呼びおこし、情念をゆたかにする二つの場合について検討し、その意味を見てきたのであるが、もう一つこの作品において説明を必要とする最大の個所について歩みをとどめなければならない。

それは第七章における、時に関する——空間に関する反省と瞑想の部分であるが、心理分析小説が本質的に室内的であるとすれば、午後から夕がた、夜をへて翌日の夜明けに至るまでの時間のあいだ、広がる大自然のなかで主人公が瞑想するこの部分は野外的と名づけてよいものであり、注目すべき個所である。

この部分は二つの次元から成り立っており、前のそれは大ざっぱにいえば時に関する反省であって想像あるいは夢想期といってよいものであり、後のはむしろ空間に関する瞑想であり、静寂で崇高な感情の次元といえるものである。

この部分は「私」であるアドルフがワルシャワまで出むき、ポーランド駐在の同国人外交官T男爵のもとをおとずれ、そこからエレノールの城館へ帰る途中でおこる心の状態をしるしたものであるが、父に依頼されているT男爵はアドルフが絶えず心で無益な戦いをくり返しているのを見ぬき、エレノールとの関係を破ろうと思っているからここまで出てきたのだと指摘した。それに對しアドルフは怒って抗議し、エレノールの不幸な環境こそが彼女の生涯を決定したこと、自分を除いてはだれも彼女を理解し、判断しえないと主張した。T男爵はこの会談においてアドルフをさとし、「あらゆる道があなたには開かれているのですよ、文学者でも、軍人でも、政治家でも。あなたは最高の名門の娘と結婚できるのです」と強調した。むなしい抗議をしてから男爵の邸を出たアドルフは、そのことばを吐かせた自分の感情が早く

も消えかかっているのを感じる。エレノールと会う時間を遅らせながら、アドルフは徒歩で街を横ぎって郊外に出る。

1 時に関する反省——想像・夢想期

「田園のただなかに至ったとき、私は歩度をゆるめたが、おびたらしい想念が私におそいかかった。つぎの不幸なことば——『あらゆる種類の成功とお前とのあいだには、越えがたい障害物が横たわっている、それはエレノールだ』が、私の耳のまわりでひびいた。帰ることなく流れ去って行ったばかりの時のうえに、私ははるかな、悲しみのにじんだ視線をなげた。青春の希望、かつて未来を思うままにできると思った自信、私の初期の試論に与えられた賛辞、輝やきいでそして消え去った世評の黎明を思いおこした。私が傲慢なさげすみをもって扱った、いく人かの学友たちの名を私は心でくり返した。彼らは一心不乱な仕事ぶりと品行方正な生活の結果だけで、幸運と尊敬と栄誉の道で私をはるか後方におき去りにしてしまった。私は自分の無為に息がつまった。守銭奴たちが、もし使えばどんな幸福でもあがなえるはずの財宝のなかに姿を現わすように、私が望むことのできたはずの

あらゆる成功を呑みこんですわっている、エレノールの姿が見えた。私が残り惜しく思ったのは一つの職業だけではなかった。どんな職業も試みなかったもので、あらゆる職業が残念だった。かつて一度も自分の力を用いなかったので、際限もなくそれを想像し、それを呪った。……

もし私が勇気を回復しようとし、活動の時期がまだ過ぎ去ってはいないのだと自分にいいかせようとすると、エレノールの影像が亡霊のように私のまえに立ち上がり、私を虚無のなかに押しもどした。私は彼女に対し怒りの発作が起ころのを感じたが、感情の奇妙な交錯によって、この怒りは、彼女を悲しませるという考えが生みだす恐れを少しも減らさなかった」

ここに描かれる無益な青春の経過に対する嘆息は、アドルフの父親を代表とする世俗の思想が環境を通じて及ぼしてくる圧力の結果生じるものであると単純にいい切ることはできないが、エレノールの影像にうちかつだけの力をもっていない、無力な情念であることは明らかである。エレノールの幽霊のような影像が立ち現われ、アドルフにつきまとって圧迫する瞬間は、流れ去って行っ

た青春の時を悼む過去の情念が、「まだ時は遅くない」という声とともににわかに現在に向かうときであることに注目しなければならない。

「こういう苦い感情に疲れた私の魂は、とつぜん反対の感情に逃げ場を求めた。心地よく平和な結婚の可能性について行き当たりばったりに吐かれたT男爵の数語が女性の伴侶の理想を私の心に描きだす助けとなった。そのような運命が私に与えるかもしれない心の平和、敬意、自立について私はつくづくと考えた。なぜならもう長いあいだ私が引きずっている束縛は、公認された関係が作りだしたものの千倍も私を従属的にしたからだ。私は父の喜びを想像した。祖国と身分者たちの社会に、ふさわしい地位を回復しようという、性急な願いを私は感じた。冷酷で軽薄な悪意が私に対して吐いたあらゆる意見や、エレノールが私を悩ました非難に対して、きびしく非の打ちどころのない振舞いで対立している自分の姿を思いえがいた。

彼女は絶えず、情がないの、恩知らずだの、憐れみがないのといって私を責める。ああ、もし社会的にふさわしいので隠しておかずともよい、父が娘として赤面する

ことなく受け入れられる女性を天が私に許してくれていたら、その女性を幸福にするのにいまよりも千倍も喜びを感じたろう。……………」

このようにしてアドルフは、「反対の感情」——すなわち想像力の庇護の内に逃げこみ、彼のあるべき生活と与えられるべき相手の女性とを思いえがき、次第に詠嘆的独白にはいつて行くのだが、これにつづく部分には感嘆文と条件法の多用が見られ、エレノールのために払ってきた犠牲のことを訴え、他のあるべき女性とのめぐり合いを希求する。つづいて過去の現実にあった生活、自然環境が現前して、理想の女性をおくべき、理想の舞台となり変わるのである。

「父とともに住んだ古い城館、それを囲む森、城壁の足下を洗う川、地平を区切る山々を私はふたび見た。これらすべての事物はあまりにも生き生きと眼前にあり、あまりにも生に満ちていたので、ほとんど堪えられないくらいのおののきを私の内部に引きおこし、私の想像力はそれらのかたわらに、それらを美化し、それらを希望によって生気づける、けがれなく若いひとりの女性をおいたのだった」

この確実な過去と希望的な未来との合体は、アドルフの心理をよく物語っている。そこからは現在が脱落しているのだ。△現在を避けているということは解決を避けて▽いるということであり、だからこそつぎの瞬間には、それが夢であり、早くも逃げ去ったとアドルフは感ずるほかはない。時間的な反省は時による解決にしか能力をもたない不決断、臆病の情念にとっては無益なものであり、だからエレノールの城館が見えてきても、しっかりと歩調で近づくことはできないのだ。

「知らず知らずに近づいていた、エレノールの城館がいきなり眼のまえに現われた。私は立ちどまり、別の道をとった。また新しく彼女の声を耳にする瞬間を、私はすすんで遅らした」

2 空間に関する瞑想——崇高な感情の次元

夕刻になり、空は晴朗と澄みわたり、田畑からはひと影が退き、自然がもとに返されたころを境としてアドルフの心には変化が生じてくるのであるが、ここで想像——夢想期が終わっていきままでに新しく次元が始まる。この部分についてはブルーが触れているが、それはこの個所をさらに二つに分け、前の章句に「無私」の体

験を、後の章句に「放棄」の主題をみとめているが、二つの章句のあいだには厳密に論理的な脈絡が欠けていることを指摘している。⁽¹⁷⁾

私はいちおうブルーのいう第一の章句をⅠで表わし、第二の章句をⅡで表わしてつぎに引用したい。

Ⅰ「私は灰色がかった地平のうえに視線をさまよわせた。もう地平の区切りは見えず、そのこと自体が、いつてみれば無辺際の感動を私に与えた。私は久しい以前からこのような感動を味わったことがなかった。絶えずつねに個人的な考えにふけり、つねに自分の状況に視野が限定されて、あらゆる普遍の想念には無縁になってしまっていた。私はエレノールと私自身のことだけに心をうばわれていた。倦怠した憐れみしか感じさせないエレノールと、もうどうしようもなく自己嫌悪に落ちいつている私とだけに。いわば新しい種類のエゴイズム、勇気の欠けた、不満な、恥辱的なエゴイズムのなかに私はちこまっていた。異なる思想の世界に生まれ変わることを私は感謝し、自分自身を忘れ去る能力が自分にあったことを知って感謝したが、そうして無私の瞑想にひたりきった。私の魂は久しい、恥ずべき墮落から立ちあがるよ

うに思われた」

(II)「ああ、こんな無益な努力はやめよう！ この時が過ぎ去って行くのを見、私の日々が過ぎからつぎへと走りぬけて行くのを、安んじて眺めていよう。じっと動かずにいよう。半ば過ぎ去った生活に無関心な傍観者でいよう。それにかかずらおうとも、それを放棄しようとも、生の長さを延ばすわけにはいかないのだ！ わざわざそれと張り合うだけの価値があるのか？」

この二つの章句についてブーレは、(II)は直接に(I)につき、(I)の結論となっているが、これら二つは同じ精神状態に属しているとは思われず、登場人物の生活において同じ時期に描かれているようではなく、作者の生活においてもたぶん同じ執筆時期に属していないのではないかと疑問を述べている。大自然の観想が狭小なエゴイズムから主人公を脱却させ、無私の精神状態に高めたからには、さらにその無私の精神状態は、エレノールのために自己を犠牲にするようにし向けるのがあるべき順序であるのに、正確には、第二の段階では犠牲はなんら問題となっていない。ただ「過去の生活に無関心な傍観者」になるだけでアドルフは甘んじている。

古典的な心理分析小説は本質的に室内的であって、たとえ場面が野外におかれたとしても人間存在同志が照明し合うことによって成り立っている。しかしアドルフはいま、——仮りの姿ながら——孤独で大自然のなかに立っている。この観想者——瞑想家は超越的な光りに照らされて自己を忘却し、同時に自己の内部に含まれる対象エレノールをも忘却して絶対的な無私の境地に至るが、自己犠牲と諦念とを生みだすまでには至らなかった。その理由として私は、アドルフの心にふたたび時の観念が入りこんできたことを指摘しなければならない。前日の、まだ夕刻にならないとき、彼は無益なものと化して行く青春の時に關して後悔し、反省し、想像力の助けを借りてあるべき状況のなかに一時的ではあるがはいりこんだ。しかしこれは俗世的であって狭小なエゴイズムをはなれることはできず、エレノールのつきまとう影像にたやすく敗れてしまった。

空間の、しかも夜の瞑想はエゴイズムからの脱却を許し、その第二段階において時の観念をふたたび招き入れたが、これは前日の、失われた（あるいは失われようとしている）俗世的期待にまつわる後悔、苛責が生じさせ

る時の観念とはちがつて、死という時の観念なのである。

「死の観念はいつも、私に多大の影響力をふるうことができた。こよなく激しい感情のうちで、この死の観念だけがあれば、すぐに私の心をしずめられるのであった。それは私の魂にいつもの効果を生みだした。エレノールへの私の気持ちは以前よりも苦いものではなくなった。………やさしくて、ほとんどおだやかな感情だけが私に残った」

自伝的な色彩の強い第一章で、ある婦人の死に出会ったことに関して死の観念が人生観の形成に重大な一因子となったことが簡単に述べられたばかりで、ここにまたそれが出現するのは唐突の感をまぬがれない。がそれはそれとして、アドルフの気持ちがしずまり、エレノールの住居を前方に見てなんのため、いもないどころか、彼女へのやさしい気持ちに満たされ、同時に彼女の不安を思いやって足早やにささ歩いて行くのを見ると、前二例と同じ傾きが心のおく底に生じていることが推察される。

彼は現在の生活に対する処置をつけるのだろうか？

自己犠牲による方針転換もなければ、関係を破るための

決断もおこなわれない。現在の生活はまたも脱落している。現在の生活は「半ば」という限定詞がつけられながらも「過ぎ去った生活」と断定され、過去に向かっていそいでいるのであり、彼は現実よりも早く、しかも現実とは格段に甘美な次元——想像の次元においてすでに自由を獲得したのである。

しかも、死は訣別のもっとも極限的な形式であり、日常的時間における予感的あるいは予定的な別れとはまた違った意味で、確定的に人間存在をおそってくるものであるから、死の観念の情念における効力は大きいといわなければならない。

以上、訣別への意志は真の自由を実現するが、アドルフにとっては存在形式としてのこの自由は絶望と同義語であり、不毛の荒野における孤独の姿をした自由であることを察知しているために、とうていこれを手にすることはできない。だからアドルフは彼なりにほんとうに自由であるとき、相手をもっとも愛しているわけであり、みずからも——依然として束縛されたままで——束縛からある意味で解脱しているのだといえよう。

- (1) René Lalou: Défense de l'Homme, 5^e édition, Éditions Rieder, 1937; De Descartes à Proust 6章6圖版°
- (2) Préface de Marcel Arland; B. Constant: Adolphe, Livre de poche, 1957; pp 6, 7
- (3) Benjamin Constant: Adolphe, édité par Ferdinand Baldensperger, textes littéraires français, Librairie Droz, Genève, 1950; p. XVII: めんめんは死ななうとてなういふ作品の第一草案では、女主人公が死ななうとてなういふなうとてなういふ。
- (4) Arland: op. cit.
- (5) B. Constant: Adolphe; Œuvres de Benjamin Constant, Bibliothèque de la Pléiade, 1957; p. 83
- (6) Notice de Emmanuel Beau de Loménie; Adolphe, texte intégral, Librairie Larousse; p 8
- (7) Œuvres, op. cit., p 14
- (8) Georges Poulet: Benjamin Constant par lui-même, Écrivains de toujours aux éditions du seuil, 1968; p 55
- (9) Œuvres, op. cit., p 34
- (10) Journal; Œuvres de B. Constant, pp 570—585
- (11) Œuvres, op. cit.
- (12) Ibid., p 79
- (13) Notes de Jacques-Henry Bornecque; Adolphe, Éditions Garnier Frères, 1963; p 328
- (14) Œuvres, op. cit., p 43
- (15) Ibid., pp 71, 72
- (16) Ibid., pp 56—60
- (17) Poulet: op. cit., pp 74—76
- (18) Œuvres, op. cit., p 15

(一橋大学講師)